

コナジラミ類情報第2号（トマト）

令和7年10月1日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

ほ場でのコナジラミ類や黄化葉巻病の発生状況に注意しましょう

1 発生状況及び今後の発生予測

9月下旬に行ったトマト（施設）の巡回調査（13ほ場調査）において、コナジラミ類の成虫の寄生枝率は3.46%（平年3.42%、前年2.64%）で過去10年と比較して3番目に高い状況です。

名古屋地方气象台9月25日発表の1か月予報によれば、向こう1か月の気温は高いと見込まれており、コナジラミ類の発生に好適な状況が続くと予想されます。ほ場での発生状況に注意しましょう。

2 防除対策

- (1) 施設内への侵入を防ぐため、開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を展張しましょう。設置してあるハウスについても、被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無いか点検し、必要に応じて補修しましょう。
- (2) ほ場内やほ場周辺の雑草は増殖源になるため除去しましょう。
- (3) 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、成虫を捕殺しましょう。
- (4) 植物体が小さいうちに防除を行いましょう。
- (5) コナジラミ類が多発すると防除が困難になるので、発生初期に表を参考に薬剤防除を徹底しましょう。薬剤抵抗性の発達を防ぐため、IRACコードが同じ薬剤を連続して使用することは避けましょう。また、薬剤抵抗性の発生リスクが低い気門封鎖剤等も活用しましょう。
- (6) 花粉交配用昆虫や天敵を利用する場合は、影響日数に注意して農薬選定しましょう。
- (7) タバココナジラミ（図1）はトマト黄化葉巻病（図2）の病原ウイルスを、コナジラミ類はトマト黄化病の病原ウイルスを媒介します。ウイルス感染株は見つけ次第抜き取り、適切に処分しましょう。トマト黄化葉巻病については、耐病性品種であっても保毒して感染源となり得るため、感受性品種と同様にコナジラミ類の防除を行いましょう。



図1 タバココナジラミ（左：幼虫、右：成虫）



図2 トマト黄化葉巻病の発病株

表 トマト、ミニトマトにおけるコナジラミ類の主な防除薬剤

作物名	農薬名	使用時期	本剤の使用回数	IRACコード	
トマト	ベストガード水溶剤 ^{※1}	収穫前日まで	3回以内	4A	
	モスピラン顆粒水溶剤	収穫前日まで	3回以内	4A	
	アグリメック	収穫前日まで	3回以内	6	
	アニキ乳剤	収穫前日まで	3回以内	6	
	コルト顆粒水和剤	収穫前日まで	3回以内	9B	
	アプロードエースフロアブル	収穫前日まで	3回以内	21A, 16	
	ベネビアOD ^{※2}	収穫前日まで	3回以内	28	
	トランスフォームフロアブル	収穫前日まで	2回以内	4C	
	ディアナSC	収穫前日まで	2回以内	5	
	グレーシア乳剤	収穫前日まで	2回以内	30	
	ダブルシューターSE	収穫前日まで	2回以内	-, 5	
	サフオイル乳剤 ^{※3}	収穫前日まで	-	- (気門封鎖) ^{※4}	
	サンクリスタル乳剤 ^{※3}	収穫前日まで	-	- (気門封鎖) ^{※4}	
	ベミデタッチ ^{※5}	収穫前日まで	-	- (成虫忌避)	
ミニトマト	ベストガード水溶剤 ^{※1}	収穫前日まで	3回以内	4A	
	モスピラン顆粒水溶剤	収穫前日まで	3回以内	4A	
	アニキ乳剤	収穫前日まで	3回以内	6	
	コルト顆粒水和剤	収穫前日まで	3回以内	9B	
	ベネビアOD ^{※2}	収穫前日まで	3回以内	28	
	トランスフォームフロアブル	収穫前日まで	2回以内	4C	
	ディアナSC	収穫前日まで	2回以内	5	
	グレーシア乳剤	収穫前日まで	2回以内	30	
	ダブルシューターSE	収穫前日まで	2回以内	-, 5	
	サフオイル乳剤 ^{※3}	収穫前日まで	-	- (気門封鎖) ^{※4}	
	サンクリスタル乳剤 ^{※3}	収穫前日まで	-	- (気門封鎖) ^{※4}	
	ベミデタッチ ^{※5}	収穫前日まで	-	- (成虫忌避)	
	野菜類	フーモン	収穫前日まで	-	- (気門封鎖) ^{※4}

花粉交配用昆虫に影響がある剤が含まれるので注意しましょう。成分ごとの総使用回数に注意しましょう。

※1 ニテンピラムを含む農薬の総使用回数は4回以内(定植時までの処理は1回以内、定植後は3回以内)。

※2 シアントラニリプロールを含む農薬の総使用回数は、5回以内(定植時までの処理及び定植直後の株元灌注は合計1回以内、定植後の株元灌注は1回以内、定植後の散布は3回以内)。

※3 殺卵効果も確認されています。

※4 気門封鎖剤は、散布液がコナジラミ類に直接かかると効果がないため、丁寧に散布しましょう。

※5 ベミデタッチは、殺虫効果はなく成虫に対する忌避効果が主体です。成虫の飛来前や発生初期に使用しましょう。

また、7日間隔で複数回散布する必要があります。

IRACコードは殺虫剤の作用機構による分類を示します。IRACコードの詳細は、

https://www.croplifejapan.org/assets/file/labo/mechanism/mechanism_irac03.pdfを参照しましょう。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。